

イスラエルの贖い主である Yahweh

107 編より詩編は第 5 巻に入る。モーセ 5 書に倣い 5 つに区分けされるが、それぞれが 30 編ずつ配分されているわけでもなく、107 編は前の諸編とも繋がっている。詩編 104 編は、全世界が神の創造されたものであること (創造神としての主)、105 編と 106 編は主なる神による「救済史」を歌っている。107 編も救済史を歌っているが、捕囚からの帰還に焦点が当てられている。捕囚といえばバビロン捕囚であるが、ここでは一般に囚われからの解放、贖い (2 節) に広げられている。32 節に「民の集会」で主をあがめよと言われ、イスラエル信仰共同体の礼拝において用いられたことが推測される。

107 編は、43 節もあり長いので大まかな読みと黙想としよう。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らを苦しみから救ってくださった」(6、13 節、19 節、28 節) が少し形を変えて繰り返され、さらに、「主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業をなし遂げられる」(8、15、21、31 節) と繰り返され一種の礼拝「式文」のようになっているのも特徴であろう。

1. 恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに (1 節)

この出だしは、「ハレルヤ」は欠如してはいるが、106 編の初行と同じである。「主に感謝せよ」。なぜなら、彼は「恵み深いから」であり、彼の「慈しみ」(ヘセド 契約への忠実) はとこしえであるから。106 編と違うのは 2 節にまず、「慈しみ ヘセド」と共に「贖い」が登場していることであろう。

2. 贖い主である主なる神 (2 節)

「主に贖われた人々は唱えよ」「主は苦しめる者の手から彼らを贖い(ガアラーム)」と言われているが、「ガーアル」とはいわゆる小羊の犠牲によるあがないというより、債務奴隷や戦争奴隷などを「代価」を支払い自由にするることである。イスラエルではルツ記にあるように近親者が代価を払って買い取る権利・義務があったようである。それは先祖伝来の土地が他者に奪われないためでもあったろう。この代価を払って買い取るという概念は、マルコ 10:45「また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」と言われ、「身代金」が「仕える」ためにという言葉と対になっている。詩編 107 編の 2 節では「敵の手から」であるが実際にはバビロニアがイスラエル人を買取り、解放した訳ではなく、ペルシャのキュロスであったのでどのような具体的出来事を指しているかは不明である。

3 節には「国々の中から集めてくださった/東から西から、北から南から。」と言われており、これはバビロン捕囚ではなく、礼拝共同体の形成あるいは終末論的ヴィジョンを語っているとも言えるかも知れない。あるいは、単に、各地より礼拝するものたちを集めるということであり、「贖い」も「救い」というような意味で、①飢えと渇きで疲れ果てている者たち、②捕らわれている者たち、③死の病に冒されている者たち、そして、④海の荒波に翻弄されている者たちが救われて、集められるということで、単にバビロン捕囚の歴史的事実を超えた広がりを持っている。

3. 彼らは、荒れ野で迷い/砂漠で人の住む町への道を見失った (4 節)

イスラエルの民は道案内者、指導者を失い、「彷徨う者」であった。「荒れ野」も「砂漠」も修辞学

的なもので内容はあまり変わらないのであろう。舗装された道があるわけではなく、磁石もあるわけではなく、道に迷う（大体、自分がどこにいるのかも分からない）ことほど不安なことではない。辺りには道を尋ねるべき人もなく、町への道を見失ったという。私自身、迷子ではないがいろいろなヴァージョンで目的地に到着しない（探しているものが見つからない！）悪夢？を見ることがある。道に迷った結果、5節にあるように、食糧がなくて空腹となり、水に渇き、魂は衰え果てた。そして、最初のリフレインが登場する。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らを苦しみから救ってくださった。」このリフレインによって詩情は一変する。「主はまっすぐな道に彼らを導き/人の住む町に向かわせてくださった。」道が見つかり、人の住む町に向かうことができた！そして、別の種類のリフレインが感謝の応答として挿入される。「主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業をなし遂げられる」そして、9節が添えられる。「なぜなら、主は渇いた魂を飽かせ/飢えた魂を良いもので満たしてくださった。」

4. 苦難の中の信仰者（10-12節）

舞台が暗転するかのようになり、10-12節は信仰者の苦難を披歴する。「彼らは、闇と死の陰に座る者/貧苦と鉄の枷が締め付ける捕らわれ人となった。神の仰せに反抗し/いと高き神の御計らいを侮ったからだ。主は労苦を通して彼らの心を挫かれた。彼らは倒れ、助ける者はなかった。」まさに、信仰者たちにとってもこの世は苦難に満ちている。

しかし、このような苦難の描写は2度目のリフレインで様変わりする。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らの苦しみに救いを与えてくださった」。テキストは多少変化している。「解放した」から「救った」へ。これに対応して、詩は、主は「闇と死の陰から彼らを導き出し/束縛するものを断ってくださった。」と謳い、次の応答のリフレインとなる。「主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業をなし遂げられる。」そして、10節の「鉄の枷」に対応して、「主は青銅の扉を破り/鉄のかんぬきを砕いてくださった。」と感謝と賛美の声を挙げる。旧讃美歌「もろびとこぞりて」の「黒鉄の扉打ち砕きて」を思い起こす。

5. 主は御言葉を遣わして彼らを癒し（20節）

歌は再び、17節よりイスラエルの民の問題性と苦難を描写し、19節で3度目のリフレイン「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らの苦しみに救いを与えられた」が登場し、印象的な「主は御言葉を遣わして彼らを癒し/破滅から彼らを救い出された。」と言われている。単数形の「神の言葉」の派遣は、神の言キリストの派遣に繋がるのだろう。その救いの出来事に言及されるとまた早速3番目の「主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業をなし遂げられる。」が来る。そして、感謝の表れとして「いけにえをささげ/御業を語り伝え、喜び歌えと勧められ、礼拝における感謝としての奉獻が重要であったことを示している。

6. 荒海の航海の危険と救い（23-32節）

歌の内容はがらりと変わり、地中海での輸出入商業の困難とそこでの守りに言及される。ニチロの漁労長であった小野さんの言葉：船底一枚下は地獄！そのような海難の中でも主が救い出してください。そこで、第4回目のカップルのリフレインとなる。そして、22節では「民の集会 エクレシア

=教会である)で主をあがめよ。長老の集いで主を賛美せよ。」と勧められる。

7. 終結部 (42-43 節)

長くなるので、33-41 節は省略するが、41 節の「羊の群れのような大家族」は印象的である。終結部はいわゆる「知恵文学」にお馴染みの姿勢が歌われる。「正しい人はこれを喜び祝い/不正を行う者は口を閉ざす。「知恵ある人」は皆これらのことを心に納め/主の慈しみに(へセド)に目を注ぐがよい。」